



 Data	2023-4
監督：武正晴	
脚本：今井雅子／足立紳	
出演：中井貴一／佐々木蔵之介／安田章大／中村ゆり／友近／森川葵／前野朋哉／宇野祥平／塚地武雅／吹越満／松尾諭／酒井敏也／桂雀々／山田雅人／土平ドンペイ／Blake Crawford／高田聖子／磨赤兒／芦屋小雁／升毅／笹野高史	

みどころ

洋の東西を問わず“詐欺師モノ”は面白いものが多い。しかして、真正面から“嘘八百”をタイトルにした映画が、遂にシリーズ化！

佐々木蔵之介は少しうさん臭いが、中井貴一はいくつになってもプリンス（貴公子）だから、彼が“秀吉七品”や光輝く茶碗＜鳳凰＞を語ると、いかにももっともらしい。

太閤秀吉の辞世の句の下の句は「浪速のことは 夢のまた夢」。しかして、“なにわ夢の陣”の展開は如何に？さて、『男はつらいよ』の50作、『釣りバカ日誌』の22作に続く、長期シリーズに育つだろうか？

■□■ “詐欺師モノ”の面白さに注目！シリーズ化の可否は？ ■□■

武正晴監督が中井貴一と佐々木蔵之介をダブル主演に据えて、“詐欺師モノ”に挑戦した『嘘八百』（17年）はなかなか面白い映画だった。その評論で私は、①「密室モノ」も面白いが「詐欺師モノ」も面白い！、②詐欺と商売の「線引き」は？小池の「目利き力」は？、③詐欺も、一人より総合力！グループ力！、④やられたら、やり返せ！さて、その計画は？、⑤かけひき、思い込み、錯覚。その展開は如何に？？、⑥付録は蛇足？それとも世代交代は不可欠？、の小見出しで詳しく書いた（『シネマ41』72頁）。

同作はシリーズ化を予定したものではなかったが、第1作のヒットによって、まさかまさかの続編『嘘八百 京町ロワイヤル』（19年）（『シネマ46』未掲載）が公開された。私はその評論のラストで「同じような設定、同じような騙し、同じようなドタバタ劇では長期シリーズ化は到底ムリ。本作ラストでは、「ひょっとして第3作も・・・？」という期待がミエミエだが、それは第2作がヒットするか否かにかかっている。そのようにシビアに考えると、シリーズ第3作は多分ムリ・・・？」と書いたが・・・。

■□■遂にシリーズ化！？お正月の初笑いにピッタリ！■□■

『男はつらいよ』シリーズが全50作で終了し、西田敏行と三國連太郎コンビによる『釣りバカ日誌』シリーズも22作で終わってしまうと、お正月にアハハと初笑いするのに最適な国民映画が不在となった。そこで名乗りを上げたのが『嘘八百』のシリーズ化に向けて、「中井貴一×佐々木蔵之介の“骨董コンビ”が、関ジャニ∞の安田章大を迎え、いざ大阪へ！」の本作だ。チラシによれば、「狙うは豊臣秀吉の幻の茶碗「鳳凰。」とされている。そのストーリーは、次のとおりだ。

これまで千利休、古田織部の茶器をめぐる大騒動。目利き古美術商と腕の立つ陶芸家のはずが、相も変わらずくすぶり続ける<骨董コンビ>の目の前に一攫千金のお宝が現れた。日本一の出世頭・太閤秀吉の縁起モノ「秀吉七品」の中でも、唯一所在不明の光輝く茶碗<鳳凰>だ。幻のお宝を狙って、開催間近の大阪秀吉博をはじめ“TAIKOH”と名乗るカリスマ波動アーティストやその財団を仕切る謎の美女が絡み、歴史・骨董・アートのロマンと強欲が激突。大阪城を背景に繰り広げられる天下の騙し合いに<骨董コンビ>分裂の危機まで勃発！？

■□■秀吉七品とは？茶碗<鳳凰>とは？それってホント？■□■

第1作では千利休、第2作は古田織部の茶碗を巡る大騒動がテーマにされていたが、第3作の“お宝”は「秀吉七品」のうち、唯一所在不明の光輝く茶碗<鳳凰>。しかし、そもそも「秀吉七品」ってナニ？茶碗<鳳凰>ってナニ？そして、それってホント？

中井貴一扮する小池則夫の話を聞いていると、いかにももつともらしいが、『嘘八百』シリーズでは彼の話を信じてはダメ。他方、“カリスマ波動アーティスト”は最初からインチキっぽいうえ、キャンパスに向かって全身を使って絵を描く姿も“パフォーマンスだけ”と思ってしまうが、その作品はなかなかのものだ。

しかして、秀吉が「露と落ち 露と消えにし 我が身かな 浪速のことは 夢のまた夢」と詠んだ「辞世の句」のように、『嘘八百 なにわ夢の陣』のドタバタ劇とその結末はいかに如何に？

■□■秀吉会に注目！“成り上がり”条件に注目！■□■

本作を鑑賞した翌日の1月8日付産経新聞には、『秀吉会』若い経営者が情報共有「新興企業 序列化で切磋琢磨」の見出しが躍った。そこでは、次のとおり紹介されている。

生き馬の目を抜くビジネス界で天下を取る一。そんな高い志を持ったスタートアップ（新興企業）の経営者らが切磋琢磨する組織が大阪にある。立身出世で天下統一を成し遂げた戦国武将、豊臣秀吉にちなんで「秀吉会」で、参加者は事業規模などにより最高位の「太閤」から最下位の「サル」まで序列化。互いの事業について付度なしで批評し合って糧とし、自社の成長につなげている。

そして、「秀吉会」における序列と“成り上がり”条件は、次のとおりだ。

秀吉会の序列と「成り上がり」条件

太閤 (0社)	売上総利益200億円、時価総額1000億円、EBITDA80億円以上のいずれか
豊臣 (2社)	売上総利益20億円、時価総額100億円、EBITDA8億円以上のいずれか
関白 (6社)	売上総利益5億円、時価総額25億円、EBITDA2億円以上のいずれか
羽柴 (8社)	売上総利益2億円、時価総額10億円、EBITDA5千万円以上のいずれか
木下 (9社)	売上総利益5千万円、時価総額5億円、EBITDA2千万円以上のいずれか
サル (7社)	売上総利益5千万円、時価総額5億円未満

※EBITDAは利払い前・税引き前・償却前利益

こりや、いかにも大阪的！“失われた30年”が続き、イキのいい企業家がなかなか生まれてこない今の日本。こんな「秀吉会」から天下取りを目指す経営者が次々と飛び出してほしいものだ。NHK大河ドラマでは『どうする家康』が始まったが、やっぱり大阪は太閤さん！

2023（令和5）年1月12日記